

15 世紀イタリアの修辞学思想

榎 本 武 文

15 世紀イタリアの修辞学思想

榎 本 武 文

目 次

はじめに.....	1
1. 15 世紀イタリアにおける修辞学と弁証術	2
2. レオナルド・ブルーニの翻訳論とその余波.....	5
3. ジョヴァンニ・ピコ・デッラ・ミランドラと エルモラオ・バルバロの修辞学・哲学優劣論争.....	15
4. アンジェロ・ポリツィアーノの哲学論.....	22

はじめに*

本論文「15世紀イタリアの修辞学思想」は、この世紀のイタリア半島、とりわけフィレンツェを中心的な舞台とする、人文主義とスコラ学との対立の諸相を探ろうとするものである。筆者は、ルネサンス期の人文主義・修辞学・古典研究全般を研究対象としているが、他の世紀・地域におけるこれらの学問領域の展開を知る上で、15世紀のイタリアにおける人文主義を研究することがきわめて重要であることを前提としてきた。たとえば、イタリアにおける16世紀以降の人文主義の展開、あるいは15世紀末に始まるフランス人文主義の性格を見究めるためには、いわば‘fons et origo’たる15世紀イタリア人文主義を知悉している必要がある。他の世紀・地域における展開は、いうなれば、この「源泉」が設定したさまざまなテーマの発展型と見ることができるからである。特に、ここで扱う「人文主義対スコラ学」という主題は、のちの人文主義文献に親しんだ人びとにとっては、頻繁に出会う馴染み深いものだろう。

この主題を扱うに際して、筆者は、人文主義とスコラ学の対立という現象を伝える代表的な3つのテキスト群を研究対象として選び出すことにした。第一に、15世紀前半フィレンツェの代表的な人文主義者といってよいレオナルド・ブルーニが自らの新しい『ニコマコス倫理学』のラテン語訳をめぐって著わした『正確な翻訳法について』と、これに対してスコラ学者陣営から加えられた攻撃。第二に、ジョヴァンニ・ピコ・デッラ・ミランダとエルモラオ・バルバロが哲学と修辞学との優劣に関して交わした書簡体による論争。第三に、15世紀後半の文献学化したフィレンツェ人文主義において最も重要といえる人物アンジェロ・ポリツィアーノがフィレンツェ大学での開講演説として発表した、文献学者が哲学的テキストを解義することの意義を称揚する『ラミア』。

以上の3つの研究対象を考察する上で、筆者は、テキストの原文を綿密に読みこむことと、テキストを取り巻く文脈を知るための研究文献を広く渉猟することとを心がけ、ブリティッシュ・ライブラリーとロンドン大学ウォーバーク研究所図書館を訪れて文献調査を試みた。この研究課題は、もとより広大な問題設定であり、筆者の能力に余るものだが、今後の研究発展のためにわずかなりとも寄与することを願いたい。

* 本論文は2001-2003年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)課題番号13610686）による成果の一部である。

1. 15 世紀イタリアにおける修辞学と弁証術

およそ 14 世紀末から 16 世紀のイタリアの知的活動全般に影響を与えるに到った新しい運動である人文主義には、いくつかの特徴的な傾向があった。まず、それは、古代ギリシア・ローマに淵源する言語表現の技術、修辞学 (rhetorica) を尊重した。修辞学は、中世期にも命脈を保ってはいたが、ルネサンス期に入って、キケロを初めとする古代の典拠から再び生命力を注入されて復活したのである。人文主義にはまた、「ゴート族」が支配したとする中世期と自らとを対立させることで自己規定をしようとする強い傾向があった。13 世紀に最盛期を迎え、15 世紀にもなお大学を中心として勢力を持っていたスコラ学・スコラ学者が、大方の人文主義者にとっての論敵だった。スコラ学の主要な研究領域は神学・哲学 (とりわけ形而上学) だったが、14 世紀にはオッカム、スコトゥスらによる唯名論的論理学の展開が見られた。人文主義者たちは、スコラ論理学に新しい言語表現技術である修辞学を対置させるとともに、自らも別個の論理学——彼らの好んだ用語で言えば「弁証術」(dialectica)——を構築しようと試みた。こうして、15 世紀イタリアの人文主義者の著述には、「人文主義対スコラ学」、「修辞学対論理学」という主題が繰り返し現われることになる。

ここで忘れてならないのは、人文主義 (ひいては〈ルネサンス〉) という運動に内在していたイタリア人の国民主義的な傾向である。スコラ学の中心地は北ヨーロッパであり、スコラ哲学・論理学の牙城はパリ大学であり、高名な論理学者にはイングランド・スコットランド出身の人びとが多かった。ガリア人やゴート族・ヴァンダル族の支配からローマを解放せよというロレンツォ・ヴァッラ (Lorenzo Valla) のよく知られた煽動的言明¹⁾や、論理学者の名前の耳障りな響きへのレオナルド・ブルーニ (Leonardo Bruni) の侮蔑²⁾に

¹⁾ L. Valla, “In sex libros Elegantiarum praefatio”, in *Prosatori latini del Quattrocento*, ed. E. Garin, Milano, 1952, pp. 598–600: ‘Nam quis litterarum, quis publici boni amator a lacrymis temperet, cum videat hanc [sc. latinitatem] in eo statu esse, quo olim Roma capta a Gallis? [...] Quousque tandem Quirites (litteratos appello et romanae linguae cultores [...]), quousque, inquam, Quirites, urbem nostram, non dico domicilium imperii, sed parentem litterarum, a Gallis captam esse patiemini? id est latinitatem a barbaria oppressam?’; “In tertium librum Elegantiarum praefatio”, *ibid.*, p. 610: ‘Gothi isti [sc. iurisperiti] quidni et Vandali existimandi sunt? Nam postquam hae gentes semel iterumque Italiae influentes Romam ceperunt, ut imperium eorum ita linguam quoque, quemadmodum aliqui putant, acceperimus, et plurimi forsitan ex illis oriundi sumus.’ (なお、以下のすべてのラテン語引用においては、原則として、底本の綴り字をそのまま用い、引用文相互の綴り字統一は行なわない。)

²⁾ “Dialogi ad Petrum Paulum Histram” (Liber I), in L. Bruni, *Opere letterarie e politiche*, ed. P. Viti, Torino, 1996, p. 98: ‘Quid autem de dialectica, que una ars ad disputandum pernecessaria est? [...] Nam illa barbaria, que trans oceanum habitat, in illam impetum fecit. At que gentes, dii boni? Quorum etiam nomina perhorresco: Farabrich, Buser, Occam, alique eiusmodi, qui omnes mini videntur a Rhadamantis cohorte traxisse cognomina. Et quid est, Coluci, ut hec ioca omittam, quid est, inquam, in

は、明らかにイタリア人としての民族主義的な自己主張の要因が働いていたに違いない。このように、人文主義はすぐれてイタリア的な運動として出発したが、15世紀末～16世紀に到ってフランス・ネーデルラントなど北ヨーロッパへその影響が及ぶと、人文主義の性格にある種の複雑さ・分裂が生じることになる。たとえば、「キケロ主義」とこれに対するエラスムスからの批判などにその矛盾が見てとれる通りである³⁾。

さて、このように修辞学重視とスコラ学への敵意とを特徴的傾向とするイタリアの人文主義は、15世紀初頭に始まるビュザンティオンの学者たちの渡来によって大きな刺激を受けることになる。ギリシア人学者の中で最も重要なのが、1397年にフィレンツェ大学のギリシア語講座職に着任したマヌエル・クリュソロラス (Manuel Chrysoloras) である。クリュソロラスは、フィレンツェ人の弟子たちにギリシア語・ギリシア文学を教授するだけでなく、ギリシア語文献のラテン語訳を奨励することで、その後のイタリア人文主義のゆくえに多大な影響を与えた⁴⁾。彼の一番弟子といってもよいレオナルド・ブルーニは、プラトン、デモステネス、バシレイオスなどを中世風の逐語訳にとらわれない新しい流儀でラテン語訳して広く当時の読者に読まれたが、ここでの主題にとって最も意義深いのが、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』の翻訳、そして後年それに付した「正確な翻訳法について」だった。ブルーニの論文は、それまで一般に流布していた中世期の逐語的翻訳 (ロバート・グローステストによる) を痛烈に批判するとともに、流麗な人文主義的ラテン語への翻訳を擁護して、大きな論争を巻き起こした。

15世紀後半に到ると、イタリア人文主義者のギリシア語の知識、彼らの文献学的手腕はますます向上する。後述するアンジェロ・ポリツィアーノがこの展開を示す好例だが、ヴェネツィア人エルモラオ・バルバロ (Ermolao Barbaro) もそれにひけをとらないギリシア学者だった。バルバロは、とりわけ古代末期のプラトン主義者たちによるアリストテレス注解を研究・ラテン語訳することで、アリストテレスの「本来の姿」に近づこうとすると同時に、アリストテレスのギリシア語原文や古代の注解を知らずにスコラ学を構築した中世の哲学者を根源的に批判した。また、スコラ学者のラテン語は古代の修辞学的規範からかけ離れた粗野なものである。こうして、バルバロはスコラ学者たちを「野蛮人」として切り捨てた。このバルバロの攻撃に対して、同じく書簡のかたちで返答したのが彼の友人ジョヴァンニ・ピコ・デッラ・ミランドラ (Giovanni Pico della Mirandola) だった。人文主義的教育を受けつつ広く哲学 (スコラ哲学を含む) の知識を身につけたピコによれば、哲学には修辞学の文飾は必要ではなく、それ独自の言語表現を持っている。修辞学を

dialectica quod non britannicis sophismatibus conturbatum sit?’

³⁾ Cf. 榎本武文「ルネサンスにおけるキケロ主義論争」、『一橋大学研究年報 人文科学研究』第36号 (1999年), pp. 269-333。

⁴⁾ Cf. E. Garin, “Le traduzioni umanistiche di Aristotele nel secolo XV”, *Atti dell’Accademia Fiorentina di Scienze Morali «La Colombaria»*, Vol. 8 (1950), pp. 55-104.

偏重する人文主義の判断基準を哲学に当てはめて非難することには意味がない。スコラ哲学は人文主義から独立した固有の価値を有する。こうしたピコの立場は、15世紀中葉の人文主義者としては特異なものだが、その師の一人であるマルシリオ・フィチーノ（Marsilio Ficino）同様にプラトン主義を含む混淆主義的な「古代神学」という歴史観を持っていたピコにとっては不自然ではなかっただろう。

15世紀初めにイタリアへギリシア語の知識を移入したクリュソロラス以降、ビュザンティオンからの亡命学者——1453年のコンスタンティノポリス陥落がこの流れを促進した——は、ヨアンネス・アルギュロプロス（Ioannes Argyropoulos）、ゲオルギウス・トラペズンティウス（Georgius Trapezuntius）らを含めて多数活躍した。彼らは、そのギリシア学の学識を生かして、大学での教育、ラテン語への翻訳、修辞学書の執筆などに従事した。こうして新たにイタリアへ移入されたギリシア学は、イタリア人の学者に受け継がれ、独自の研究を生み出すに到った。ギリシア文献学の領域において最大の手腕を発揮した一人が、メディチ家の庇護の下フィレンツェ大学で教鞭を執ったアンジェロ・ポリツィアーノ（Angelo Poliziano）である。当時知られていたギリシア・ローマ文学のほぼ全領域を知悉していたポリツィアーノは、近代古典文献学の先駆をなすとも考えられる歴史的・系統学的思考を文献伝承研究に適用し、とりわけ『雑録』（*Miscellanea*）の中でその膨大な学識を誇示してみせた。ポリツィアーノは、フィレンツェ大学での講義の対象を文学から徐々にアリストテレス哲学へと拡張し、1492年度には論理学の分野で『分析論前書』を講じた。その年度の「開講演説」（*praelectio*）として公表したのが、『ラミア』である。人文主義者が哲学を講じることへ揶揄と批判の矢を放った大学の同僚たちに対して、ポリツィアーノは、寓話のかたちをとった哲学論を繰り広げるとともに、文献学者には、哲学書を含むいかなる種類の古代文献をも論じる能力があることを主張した。

以上のように、ブルーニ、バルバロ、ピコ、ポリツィアーノは、各々独自のやり方で修辞学／文献学と弁証術（論理学）／スコラ学との対立を扱ったが、それぞれの態度は、彼らが活動した時代背景を反映しつつ、人文主義にとってこの対立が枢要な問題であることを一貫して示しているといえるだろう。もう一つの一貫した要因は、人文主義とアリストテレスとのかかわりである。スコラ学が中世期にアリストテレス哲学の摂取によって誕生したことは周知の歴史的事実だが、人文主義も、スコラ学とは異なった角度からアリストテレスに対せざるをえなかった。その結果として、「人文主義的アリストテレス主義」とでもいうべきものが誕生したのである。このように、アリストテレスは、中世／スコラ学からルネサンス／人文主義への思想史的展開をたどる上で便利な座標軸であるとともに、15世紀イタリアの人文主義自体の変化を見定めるのに有用なものさしと考えることができる⁵⁾。以下の数節で、この変化をいくらか仔細に考察してみることとしたい。

⁵⁾ Cf. Ch. B. Schmitt, *Aristotle and the Renaissance*, Cambridge, Mass., 1983.

2. レオナルド・ブルーニの翻訳論とその余波

アレッツォに生まれてフィレンツェ共和国の書記官長を長く務めた人文主義者レオナルド・ブルーニ（1370–1444）は、『道徳哲学入門』（*Isagogicon moralis disciplinae*）などを著わした哲学者として、また『フィレンツェ人の歴史』（*Historiae Florentini populi*）や『フィレンツェ市頌』（*Laudatio Florentinae urbis*）を書いた「市民的」人文主義者・歴史家として当時の読者に広く読まれたが、ギリシア語からラテン語への翻訳を本格的・大量に行なったイタリア人学者の最初の世代に属する人物でもあった⁶⁾。これらギリシア文学・哲学のブルーニによるラテン語訳は、手写本においても印刷本においても、イタリアのみならずヨーロッパ全域に広範囲に伝播した。ブルーニ、ロベルト・ロッシらを含むイタリア人翻訳者の第一世代を形成したのは、1397年にビュザンティオンからフィレンツェへ渡来してこの都市の大学でギリシア語を講じたマヌエル・クリュソロラス（ca. 1350–1414）だった。翻訳に対するクリュソロラスの考え方を、チェンチオ・デイ・ルスティチ（Cencio dei Rustici）が書簡の中で伝えている。

疑いようもなく神の如き人であったマヌエルは、字句に即してラテン語に翻訳することには価値がないと語っていた。それは、馬鹿げているだけでなく、時としてギリシア語の意味をまったく捻じ曲げてしまうものだからだと。むしろ、次のようなやり方で意味に即して移し替えるべきだと主張していたものだ。すなわち、こうした事柄に従事する人びとは、ギリシア語の持つ特性を決して変えることをしないという規則を自らに課すべきなのだ [……]⁷⁾。

ブルーニらイタリア人の弟子たちは、師クリュソロラスの教えを守り、西ヨーロッパ中世に、すなわちスコラ学者たちの時代に行なわれていた「字句に即した」逐語訳——ギリシア語の単語とラテン語の単語とを逐一对応させる翻訳法——を捨て去って、「意味に即した」新しい流麗な翻訳法を採用するようになった。

ブルーニは、おおよそ1405年から1436年に到るまで、さまざまなギリシア語文献をラテン語訳した。プラトンの『パイドン』、『ゴルギアス』、『パイドロス』、『ソクラテスの弁

⁶⁾ ブルーニの略伝として、次項目を参照。C. Vasoli, “Bruni, Leonardo, detto Leonardo Aretino”, *Dizionario biografico degli Italiani*, Vol. 14, Roma, 1972, pp. 618–633.

⁷⁾ L. Bertalot, “Cincius Romanus und seine Briefe”, in *Studien zum Italienischen und Deutschen Humanismus*, ed. P. O. Kristeller, Vol. 2, Roma, 1975, p. 133: “[F]erebat Manuel homo sine ulla dubitatione diuinus conuersionem in latinum ad uerbum minime ualere. Nam non modo absurdum esse asseuerabat, uerum etiam interdum grecam sententiam omnino peruertere. Sed ad sententiam transferre opus esse aiebat hoc pacto ut ii qui huiusmodi rebus operam darent, legem sibi ipsis indicercnt, ut nullo modo proprietates graecae immutarentur [...]’

明』など、聖バシレイオス、クセノポン、デモステネス、プルタルコス、そして、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』、『家政学』（現在は偽作とされる）、『政治学』などである。『ニコマコス倫理学』の翻訳は1416-17年に行なわれ、ブルーニはこれを教皇マルティヌス5世に献呈するとともに、その「序文」の中で、従来流布していた中世期のラテン語訳——13世紀前半、ロバート・グローステスト（Robert Grosseteste）に現在帰されている——を痛烈に批判した。

私は先頃アリストテレスの『倫理学』をラテン語に翻訳することにしたが、それは、これらの書がこれまで翻訳されていなかったからではなく、ラテン語というよりはむしろ野蛮語に変えられたと思われるようなやり方で翻訳されていたからである。というのも、あの翻訳の作者（この者が誰であったにせよ——もっとも、説教者の修道会〔ドミニコ会を指す〕に属していたことは自明だが）がギリシア語もラテン語も十分には知らなかったことははっきりしているのだから。彼は、多くの箇所ではギリシア語を誤解しているし、ラテン語を子供じみた無学な仕方では書いているため、このように無気力で鈍重な生硬さにはひどい恥ずかしさを覚えるほどである。そればかりか、しばしば、最良かつこの上なく立派なラテン語である単語を知らずにわれらの〔ラテン語の〕豊穡さのうちで物乞いをしており、ギリシア語の単語をラテン語へ移すことができないでいる。あたかも絶望し考えあぐねているかのように、ギリシア語のままに放置しているのである。こうして、この者は、何か半ばギリシア人、半ばラテン人のようなものとなり、いずれの言語においても不十分で、どちらの言語においても五体満足ではないのである⁸⁾。

さらに、ブルーニは、アリストテレスの雄弁、その雄弁をラテン語に移すことの必要性、ラテン語が決してギリシア語に劣る言語ではないことを述べたあと、「古い翻訳者」の訳文を引用して、訳語の選択の誤りを指摘している。まず、ギリシア語の単語を単に字訳し

⁸⁾ “Praemissio quaedam ad evidentiam novae translationis Ethicorum Aristotelis”, in L. Bruni Aretino, *Humanistisch-philosophische Schriften*, ed. H. Baron, Leipzig und Berlin, 1928, pp. 76-77: ‘Aristotelis *Ethicorum* libros facere Latinos nuper institui, non quia prius traducti non essent, sed quia sic traducti erant, ut barbari magis quam Latini effecti viderentur. Constat enim illius traductionis auctorem (quicumque tandem is fuerit, quem tamen ordinis praedicatorum fuisse manifestum est) neque Graecas neque Latinas litteras satis scivisse. Nam et Graeca multis in locis male accipit et Latina sic pueriliter et indocte reddit, ut vehementer pudendum sit tam supinae crassaeque ruditatis; quin etiam frequenter, verborum quae optima et probatissima Latinitatis habet, ignarus atque in opulentia nostra mendicans, cum Graeco verbo Latinum reddere nesciat. Quasi desperans et consilii inops ita, ut iacent Graeca, dimittit. Ita semigraecus quidam et semilatinus fit, in utraque deficiens lingua, in neutra integer.’

たにすぎないもの（εὐτραπεία: eutrapelia; βωμολοχία: bomolochia）。これらには各々 urbanitas, rusticitas という対応するラテン語の単語が存在するのであり、それらを使うべきだとブルーニは言う。また、ギリシア哲学において中心的な単語、すなわち「美しさ（立派さ）」（τὸ καλόν）を honestum ではなく bonum と訳していることから、この翻訳者には哲学の知識が欠けていたことを主張している。さらに、キケロ、セネカらの古典的ラテン語の慣用に照らした不適切な訳語の選択（ἡδονή [快樂] は「古い翻訳者」のように delectatio ではなく voluptas, λύπη [苦痛] は tristitia ではなく dolor と訳すべき、など）を指摘する。

ブルーニは、この短い「序文」を以下のように締め括っている。

それゆえ、私は、ほとんど無数と言ってよいこの種の誤りによって心動かされ、こうしたことがアリストテレスにもわれわれとわれわれの言語 [ラテン語] にもふさわしくないものと考えたために、また、ギリシア語において最もすぐれたこれらの書の優雅さが荒々しい響きに変えられ、単語が捻じ曲げられ、[述べられている] 事柄が理解しにくいものにされ、教説が破壊されているのを目にしたために、新しい翻訳の労を執ることにしたのである。この翻訳において、他のことは言わないとしても、次のことを自分が成し遂げたと考える。以前にはラテン語訳されていなかったのも、これらの書をいまや初めてラテン語に移したのだと⁹⁾。

『ニコマコス倫理学』の翻訳を公にし、「序文」を発表してから数年後の 1420 年頃、ブルーニは、これらに対して加えられた批判に応えるために、より長い論文『正確な翻訳法について』（*De interpretatione recta*）を執筆した¹⁰⁾。「序文」での「古い翻訳者」（*interpret antiquus*）への攻撃があまりに厳しすぎるとする批判者たちに、ブルーニはまず、美しい絵画が汚されれば立腹するのと同じように、アリストテレスの書物が汚染されるのを見て自分は心をかき乱されたのだと言い、また、この翻訳者に対して人格攻撃をしたわけではなく、ただ翻訳の技倆不足を突いたにすぎないと応える。『正確な翻訳法について』はブルーニ自身によって 3 つの部分に分割されているから、この区切りに従って内容を見ることにしよう。すなわち、(1) 正しい翻訳の方法についての考え方、(2) 「古い翻訳者」へ

⁹⁾ *Ibid.*, p. 81: ‘Ego igitur infinitis paene huiusmodi erroribus permotus, cum haec indigna Aristotele indignaque nobis ac lingua nostra arbitrarer, cum suavitatem horum librorum, quae Graeco sermone maxima est, in asperitatem conversam, nomina intorta, res obscuratas, doctrinam labefactam viderem, laborem suscepi novae traductionis. In qua, ut cetera omittam, illud assecutum me puto, ut hos libros nunc primum Latinos fecerim, cum antea non essent.’

¹⁰⁾ 『正確な翻訳法について』は、次の選集から引用する。“De interpretatione recta”, in Bruni, *Opere letterarie e politiche*, ed. P. Viti, Torino, 1996, pp. 145–193. この選集の刊行後、同じ編者による次の詳細な注解つき版が出版された。L. Bruni, *Sulla perfetta traduzione*, ed. P. Viti, Napoli, 2004.

の攻撃が正当になされたことの説明、(3) こうした攻撃が学識ある人間の慣習に合致していることである¹¹⁾。

いかに翻訳が行なわれるべきかを述べる第1部で、ブルーニは、翻訳を「一つの言語で書かれた事柄をもう一つの言語に正確に移すこと」と定義することから始める。これを正確に果たすためには、双方の言語について十分な知識を持っていること、また知識に加えて実践の経験を積んでいることが必要になる。かくして、正確な翻訳とは困難な大事なのである。

まず、そこから翻訳するための元の言語（この場合はギリシア語）について知識を持たねばならない。しかも、それは矮小で卑俗な知識ではなく、哲学者、弁論家、詩人、その他のあらゆる著述家を長期間にわたって読んで得られた、多大で詳細かつ正確な知識でなければならぬ。このことは、アリストテレスとプラトンが優雅な文体で書き、しばしば修辭学的な文飾を用いているという理由からも必要なのである。個々の単語の意味とは異なった意味を持つ慣用語法、類義語の意味の差異、詩人たちからの引用句によって伝えられる意味、翻訳者はこうしたものすべてに多岐にわたる読書を通じて習熟していなければならない。

次に、そこへと翻訳すべきもう一つの言語（ここではラテン語）を完全に支配している必要がある。ラテン語の無知のためにギリシア語の単語のままにしておくようなことがあってはならず、ラテン語の類似した名詞や動詞の用法の違いを識別すること、最良の著述家が用いる文飾を模倣によって習得すると同時に野蛮な新語を避けること。

こうした知識は必要だが、加えて鋭敏な耳とその判断力を持っている必要もある。調和した、韻律になかった文体で書かれている文章を翻訳者が台無しにしてしまわないようにするためである。とりわけプラトンとアリストテレスの書物には事物の学識と文体の修飾とが両々相俟って見いだされるのだから、技倆ある翻訳者はそれら双方を訳文において保存しなければならない。

ブルーニの著作に関して以下の研究文献を参照。H. Harth, “Leonardo Brunis Selbstverständnis als Übersetzer”, *Archiv für Kulturgeschichte*, Vol. 50 (1968), pp. 41–63; J. Hankins, “Notes on Leonardo Bruni’s Translation of the *Nicomachean Ethics* and its Reception in the Fifteenth Century”, in *Les Traducteurs au travail: Leurs manuscrits et leurs méthodes*, ed. J. Hamesse, Turnhout, 2001, pp. 427–447; *id.*, “Traduire l’*Ethique* d’Aristote: Leonardo Bruni et ses critiques”, in *Penser entre les lignes: Philologie et philosophie au Quattrocento*, ed. F. Mariani-Zini, Villeneuve d’Ascq, 2001, pp. 133–159; P. Viti, “Introduzione”, in Bruni, *Sulla perfetta traduzione*, *cit.*, pp. 3–72. また、アリストテレス主義を含む哲学文献のルネサンス期における翻訳に関して前注(4)とともに以下を参照。Ch. B. Schmitt, *Aristotle and the Renaissance*, *cit.*, pp. 64–88; B. P. Copenhaver, “Translation, Terminology and Style in Philosophical Discourse”, in *The Cambridge History of Renaissance Philosophy*, ed. Ch. B. Schmitt *et al.*, Cambridge, 1988, pp. 77–110.

¹¹⁾ 底本 *Opere letterarie e politiche* のページ数によれば、区切りは以下のようになる。第1部 pp. 152–176, 第2部 pp. 176–192, 第3部 p. 192。

反対に、悪しき翻訳者の欠点とは、原文を誤解すること、訳文を不手際につくること、原著者が適切かつ優雅に表現した事柄を不適切かつ醜悪に翻訳することである。学識を備えていないままに翻訳に着手しようとする者が非難されるのは正当なことなのだ。(読む)人々を誤解させて過ちへと導き、原著者の威厳を笑うべき滑稽な姿に見せてしまうのだから。詩人にせよ彫刻家にせよ、無知によって悪しき作品をつくる者が批判されるのは当然なのである。

この時点で、ブルーニは、次のように要約して理想的な翻訳者を描いているが、この章句は、ルネサンス期の修辞学において用いられる絵画との比較論を例示する上で重要なばかりでなく、ルネサンス期の人文主義者が翻訳という行為の心理的な機微をいかに捉えていたかを物語っている点で興味深いだろう。

ある絵画を手本にして別の絵画を描く人びとが、手本から容姿、体型、歩き方、肉体全体の形状を受け継ぎ、自分たちが何をなしているかではなく、もう一人の人〔手本を描いた画家〕が何をなしたかを考える。それと同じく、翻訳において、最良の翻訳者は精神と心と意思の全体で最初の著者に自らを移し替えてある仕方で変身し、その文章の容姿、体型、歩き方、色彩、輪郭をそっくり表現しようと努力するだろう。そこから、何かある驚くべき結果が生まれてくるのだ¹²⁾。

キケロ、サルスティウス、リウィウスは各々が特徴的な文体を用いたが、良き翻訳者は、それぞれの文体に自らを適合させ、それぞれの容姿を手に入れようとするだろう。

ここでブルーニは再び技術的な難点の議論に戻り、韻律と文飾を論じる。韻律をもって書かれた文章(散文)を翻訳することが最もむずかしい。文飾、文、完全文(periodos, comprehensio)に従い、正しい韻律によって終わるよう留意すべきである。文飾を保存しないならば、原文の威厳がそこなわれてしまう。文飾は単語(verba)と意味／思考(sententie)の2種類に分けられるが、2つのうちで、単語の文飾がより大きな困難をもたらす。というのも、これらは韻律を伴うことが多いからである。ラテン語の単語はギリシア語の単語と同じ数の音節を持たないことがしばしばあり、同じ響きで耳に入るわけではないからだ。

このあと、ブルーニは、ギリシア語からラテン語への翻訳において、韻律と単語・意味の文飾との保存が重要であることを例示するために、プラトン(『パイドロス』237^b-238^c,

¹²⁾ “De interpretatione recta”, p. 160: ‘Ut enim ii, qui ad exemplum picture picturam aliam pingunt, figuram et statum et ingressum et totius corporis formam inde assumunt nec, quid ipsi facerent, sed, quid alter ille fecerit, meditantur: sic in traductionibus interpretes quidem optimi sese in primum scribendi auctorem tota mente et animo et voluntate convertet et quodammodo transformabit eiusque orationis figuram, statum, ingressum coloremque et liniamenta cuncta exprimere meditabitur. Ex quo mirabilis quidam resultat effectus.’

257^{a-c}) とアリストテレス (『ニコマコス倫理学』第10巻 1178^b, 第2巻 1103^{a-b}, 1105^{a-b}, 『政治学』第7巻 1323^{a-b}, 1322^a) からのいくつかの章句を自らラテン語訳してみせている。

『正確な翻訳法について』の第2部は「古い翻訳者」への攻撃の正当性を示すための例証に充てられている。ここでブルーニは『政治学』第4巻 (1297^a) の短い一節を選び出し、「古い翻訳者」——ブルーニはこれを『ニコマコス倫理学』と同じ翻訳者と考えたが、現在ではグローステストではなく13世紀後半のドミニコ会士ムールベケのグイレルムス (Guillelmus de Moerbeka) と考えられている——による訳文の欠陥を具体的に指摘する。

問題の一節で、アリストテレスは、権力者が民衆を国家の運営から排除するための口実として用いる5つの策略を描写している。すなわち、集会、官職、法廷、武装、演習である。これらに参加しない富者に対しては重い刑罰が課されるが、貧者に対しては罰則が与えられることはない。しかし、その真意は、多数を占める民衆に国家運営への参加を拒むところにあるのだとする。原文とブルーニの訳文とをまず掲げておこう。

ἔστι δ' ὅσα προφάσεως χάριν ἐν ταῖς πολιτείαις σοφίζονται πρὸς τὸν δῆμον πέντε τὸν ἀριθμόν, περὶ ἐκκλησίαν, περὶ τὰς ἀρχάς, περὶ δικαστήρια, περὶ ὄπλισιν, περὶ γυμνασίαν.¹³⁾

Esse vero illa, in quibus ista simulatione utuntur, quinque numero: contiones, magistratus, iudicia, armaturam, exercitationem.¹⁴⁾

次に、「古い翻訳者」の訳文 (‘Adhuc autem, quecumque prolocutionis gratia in politis sapienter loquuntur ad populum, sunt quinque numero: circa congregationes, circa principatus, circa pretoria, circa armationem, circa exercitia’) とブルーニのコメントが続く。

この翻訳者は、次のように言う。[……] ——不死なる神よ、一体誰にこれが理解できるというのか? こんなものを熱病に浮かされた戯言や蛮族の言葉ではなく翻訳と呼ぶ人がいるだろうか? できるものなら、この翻訳者の擁護者にどうかこれらの誤りを擁護してもらいたいものだ。でなければ、この者を非難したからといって私に腹を立てるのは止めていただきたい¹⁵⁾。

¹³⁾ ロエブ古典叢書版のテキスト (Aristotle, *Politics*, ed. H. Rackham, London and Cambridge, Mass., 1932, p. 338 [Lib. IV, 1297^a])。

¹⁴⁾ “De interpretatione recta”, p. 176.

¹⁵⁾ *Ibid.*, p. 178: ‘Inquit enim interpres noster hoc modo: ‘Adhuc autem, quecumque prolocutionis gratia in politis sapienter loquuntur ad populum, sunt quinque numero: circa congregationes, circa principatus, circa pretoria, circa armationem, circa exercitia’. — Deus immortalis, quis hec intelliget?’

この訳文に対するブルーニの批判は、まず、主としてギリシア語・ラテン語双方の語彙の知識にかかわっている。最初の部分（prolocutionis gratia [...] sapienter loquuntur ad populum）をとり上げて、中世風ラテン語の単語（prolocutio）の野蛮さ、ギリシア語の単語（σοφίζονται）の誤解を指摘する。さらには、5つの策略を指す単語（「古い翻訳者」は congregatio, principatus, pretoria, armatio, exercitia と翻訳した）がすべて古代ギリシア・ローマの歴史的事実に照らして不適切なものであることを示す。ここで重要なのは、「正確な翻訳」に必要な「2つの言語」の知識が、単に辞書的・語学的なものにとどまらず、歴史学的な領域にまでわたっている点だろう。古代ギリシアのポリス政治と古代ローマの共和制・帝制政治をブルーニは知っていた。「古い翻訳者」は知らなかった。ブルーニは、ギリシアとローマの統治形態を比較して、ギリシアの歴史的事実を表わすのに適切な単語を古典的ラテン語の語彙から選択した。中世の修道士である「古い翻訳者」にはそうした歴史学的関心はなく、歴史的文脈から離れた抽象的な（中世的）ラテン語の単語を当てはめたのだろう。

上記の一節に続く箇所訳文をさらに引用したあと、ブルーニはその文体上（韻律・文飾）の欠陥を攻撃する。

アリストテレスの優雅な文体よ！ 彼は、あれほど大きな熱意をもって修辞学について書き、あれほどの光輝、あれほどの文飾で書物を満たしたというのに。これらは、この者によってこのような戯言、このように馬鹿げた言葉、このように唾のような言葉でラテン語に翻訳されているため [...] 文字の初歩を習い始めた子供たちにすら耐えがたいのではないか¹⁶⁾？

私の何と無邪気なことか！ この手の人間たちに、文飾、文、完全文、文飾や単語と意味との装飾を保存することを求めるとは。彼らは、そうしたことを知らないのはもちろんのこと、言葉の初歩すら学んでいないように思えるのだから。[彼らの]言葉への無知、粗野はかくも大きなものなのだ¹⁷⁾。

Quis hanc interpretationem ac non potius delirationem ac barbariem vocabit? Veniant queso defensores huius interpretis et istos, si possunt, defendant errores vel desinant mihi irasci, si illum reprehendi.'

¹⁶⁾ *Ibid.*, p. 184: 'O Aristotelis elegantiam! Qui tanto studio de arte rhetorica scripsit, qui tanto splendore tantoque ornatu libros suos refersit. Istane tam balbutientia, tam absurda, tam muta in latino illi redduntur [...] que vix in pueris primas discentibus litteras tolerabilia forent?'

¹⁷⁾ *Ibid.*, p. 190: 'O me simplicem! Qui cola et commata et periodos et dicendi figuras ac verborum sententiarumque ornamenta servari postulem ab huiusmodi hominibus, qui, nedum ista non sentiunt, sed ne primas quidem litteras tenere videantur; tanta sunt ignorantia ruditatesque loquendi.'

第2部の末尾では、ギリシア語の単語の字訳を用いることが不適切であること、ラテン語で表現できないギリシア語などはないことが強調される。たとえば, oligarchia, democratia, aristocratia はそれぞれ paucorum potentia, popularis status, optimorum gubernatio とラテン語で表現することができるし、そうすべきなのである。

ごく短い第3部は、聖ヒエロニウムとキケロの先例を挙げて、ブルーニの攻撃が学識ある人間の慣習に反するものではないことを主張する。彼らの攻撃に比べれば、自分の攻撃は温和なものに見えるだろうし、こうした野蛮さに慣れた当代の人びとではないヒエロニウムとキケロには、この墮落したラテン語はまるで怪物めいたものに思われただろうと。

＊

ブルーニの「序文」を読み、これに反論した人びとの中に、ブルゴス司教を務めたスペインの聖職者カルタヘナのアロンソ（アルフォンソ）（Alonso [Alfonso] Garcia de Cartagena, 1384–1456）がいた。1430年頃サラマンカで書かれたと推定されるこの反論¹⁸⁾には、当時のスコラ学者の人文主義への典型的な反応が見てとれる。以前ブルーニがラテン語に翻訳したデモステネスの弁論や聖バシレイオスの小論を読んでその雄弁に感心していたアロンソは、ブルーニを「新しいキケロ」とまで称讃する。しかし、サラマンカでの一夜の会話中に持ち出されたブルーニの新訳『ニコマコス倫理学』を見たアロンソは、その「序文」を読んで驚愕する。

古くからある作品に何かを付け加えるのであれば大いに慶賀すべきことであろうが、しかし正しく書かれているものを全面的に排除すべく付け加えようとすることは、理性に反するように思われる。[……ブルーニは] 古い翻訳を強く攻撃し、欠陥があることはおろかまったくの無価値とまで批判しており、まるで欠点があるのではなく翻訳自体が存在しないかのように、『倫理学』の書がいまだラテン語には翻訳されていないと確言しているため、私は正当にも反論すべきだと考えた。[……] 私は、雄弁

¹⁸⁾ A. Birkenmajer, “Der Streit des Alonso von Cartagena mit Leonardo Bruni Aretino”, in *Vermischte Untersuchungen zur Geschichte der mittelalterlichen Philosophie* (Beiträge zur Geschichte der Philosophie des Mittelalters. Texte und Untersuchungen; Bd. 20, Hft. 5), Münster, 1922, pp. 129–210. アロンソはユダヤ教からの改宗者を父として生まれ、サラマンカ大学で学んだ後父と同様に聖職者の道を歩んだ。1420年以降カスティリャ王フアン2世の愛顧を受け、1434年その公使としてバーゼル公会議に赴いた。1435年父の後を継いでブルゴス司教に叙された。1439年までバーゼルを中心とした中欧にとどまり、ローマを経て、1440年スペインに帰国、死まで自らの司教区を監督した。以上のアロンソの略伝およびブルーニへの反論の執筆年代推定は Birkenmajer, “Einleitung” (“Der Streit”, cit., pp. 127–157) に従う。アロンソのテキストは, “Liber Alphonsi episcopi Burgen-sis” (*ibid.*, pp. 162–186) から引用する。

と叡智の武器を捨てて、すべての理性ある生きものが等しく備えている理性の石だけをもって、レオナルドを攻撃しようとしてではなく、古い翻訳者を擁護しようとして、争いに馳せ参じるのだ¹⁹⁾。

アロンソはまず、この論争の前提として、自分がギリシア語にまったく無知であることを提示する。

それゆえ、ひどく批判されている箇所であれわれの翻訳者が書いている通りにギリシア語で書かれているかではなく、そう書かれていることがありえたかを考察しよう。さまざまな言葉で表現されてはいても、理性はあらゆる民族に共通なのだから。したがって、ギリシア語に合致しているかではなく、ラテン語がそれを許容するか、適切に書かれているか、そして事物自体に一致しているかをわれわれは議論するだろう[……。]。アリストテレス自身が権威から理性を求めたのではなく、理性から権威を求めたのだから、理性に合致するものは何であれアリストテレスが言ったと考えなくてはならないし、われわれの翻訳が叡智をもってラテン語にしているものは何であれギリシア語で書かれていたと考えることにしよう²⁰⁾。

つまり、アロンソは、「古い翻訳者」の翻訳の是非を判断するのに、ギリシア語原文を参照する必要はなく、単に「理性」と事物とをものさしとすればよいと述べている。これは、「一つの言語で書かれた事柄をもう一つの言語に正確に移すこと」というブルーニによる翻訳の定義とは対極に位置する思想だろう。

このあと、アロンソは、ブルーニの「序文」での批判に逐一反論する。まず、ギリシア語の単語の字訳については、キケロ、イシドルスのような著述家がギリシア語をそのまま

¹⁹⁾ “Liber Alphonsi episcopi Burgensis”, p. 165: ‘Abunde enim gratulandum est, si antiquis laboribus aliquid adiciamus; sed sic addere uelle, ut ex toto dirimantur recte conscripta, alienum a ratione uidetur. [...] [Q]uia in tantum in antiquam translationem insiluit, ut nedum uitiositatis sed totius nullitatis redarguat, libros Ethicorum nondum in Latinum conuersos affirmans, quasi non uitiosa sed penitus nulla translatio fuerit, merito obuiandum putauit [...]. [E]go eloquentiae ac sapientiae armis exutus cum solo rationis lapide, qui omni rationali animali communis, non ut Leonardum offendere, sed ut antiquum translatores defendere temptem, ad conflictum accuro.’

²⁰⁾ *Ibid.*, p. 166: ‘Non ergo an in Graeco sic scriptum est, sed an sic scribi potuit, ut translator noster edixit illis in locis, ubi dire reprehensus est, inquiremus. Ratio enim omni nationi communis est, licet diuersis idiomatibus exprimatur. An ergo Latina lingua toleret proprieque scriptum sit et rebus ipsis concordet, non an Graeco consonet, discutiemus [...]. Cum igitur Aristoteles ipse non rationem ab auctoritate, sed auctoritatem a ratione consecutus est, quicquid rationi consonat, haec Aristoteles dixisse putandus est et Graece arbitremur scriptum fuisse, quicquid Latinis uerbis translatio nostra sapienter depromit.’

使っているし、grammatica, logica, rhetorica, philosophia, theologia のような単語が現に通
用しているではないか。また、ラテン語は決して純粋な言語ではなく、ギリシア語のほか
にガリア人やゲルマン人などの言葉からの借用語が混入している。bomolochia, eutrapelia
について言えば、これらのギリシア語をラテン語に訳してしまうと不適切な意味を帯びる
ことになるから、そのまま字訳するほうがよい。

ブルーニは、bonum ではなく honestum, delectatio ではなく uoluptas, tristitia ではなく
dolor, malitia ではなく uitium と訳すべきだと言い、その根拠としてキケロやセネカの道
徳哲学論での用法を挙げているが、彼らはそれほどの信頼を置くに足るのだろうか。確か
に、ラテン語の雄弁においてはキケロに並ぶ者はいないだろうが、道徳哲学において彼に
首位を認める意見をわれわれは読んだことがない。アリストテレスが『ニコマコス倫理学』
で論じている問題をキケロは扱っていないし、キケロがこの分野でアリストテレスに匹敵
するなどということはいえない。セネカにしても同様である。

私がこうしたことを言ったのは、[……] 道徳的学説を雄弁に従属させるべきだと考
える人びとの [……] 過誤の芽を摘んでおこうとするためである。[道徳哲学は雄弁
よりも] 確かに高邁なものであり、雄弁の源泉たるキケロ自身もそのことを否定して
いない。キケロは、弁論術を正当に自らに属するものと考えながら、哲学は他の人び
とに譲ると述べているのだ。このことは言うておくが、諸学の厳密きわまる結論を雄
弁の規則に下属させようと望む者は思慮を欠いている、単語を足したり引いたりする
ことは説得の快さに属することであり、学問の厳密さはそうしたものを嫌悪するの
から²¹⁾。

アロンソの反論の後半部は、bonum, delectatio, tristitia, malitia という訳語が適切なもの
であることを、古代ローマの著述家（キケロ、セネカ、ボエティウス）、教父（ナジアン
ゾスのグレゴリオス、アウグスティヌス、ヒエロニムス）、中世の辞典（『カトリコン』）
を引用しながら、哲学的に論証しようと努めている。ブルーニが選択した honestum,
uoluptas, dolor, uitium という訳語は、いずれも用いられている概念を表わすのには不適切
だとアロンソは主張する。

書簡のかたちをとったこの反論の末尾で、カルタヘナのアロンソは相手にこう忠告して
いる。

²¹⁾ *Ibid.*, p. 175: ‘Nec me putes ista dixisse [...] sed ut errorem illorum [...] in ipso mox ortu
amputemus, qui putant sententiam moralem eloquentiae subiugandam, cum profecto altior sit, quod nec
ipse etiam fons eloquentiae Cicero negat, qui oratoriam artem iure quodam modo proprio sibi uindicans,
philosophiam aliis se concessisse fatetur. Crede enim mihi: qui scientiarum districtissimas
conclusiones eloquentiae regulis subdere uult, non sapit, cum uerba addere ac detrahare ad
persuasionis dulcedinem pertinet, quod scientiae rigor abhorret.’

あなたはこの短い討論から次の短い結論を引き出されるがよい。道徳哲学の事柄を考究する際には、古い翻訳を離れないように。一方、われわれの議論が論じた新しい伝承〔翻訳〕のほうは、何事かをより明白に解説してほしい箇所以一种の注釈として利用し、本文の中には受け入れないこと²²⁾。

＊

以上のように、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』の新旧の翻訳をめぐるレオナルド・ブルーニとカルタヘナのアロンソの論争は、15世紀前半における人文主義=修辞学とスコラ学との対立点を先鋭に示している。人文主義者は、修辞学に則った雄弁で典雅なラテン語を、哲学文献を翻訳する際にも優先していた。また、テキストの理解においてはそれが書かれた時代背景を歴史学的に認識すること、ギリシア語からラテン語へ翻訳するときには2つの言語の正確な知識が必要であることを前提としていた。それに対して、スコラ学者にとって、古くから（中世期から）伝承されてきた既存の翻訳はそれ自体が一つの独立した本文であり、ギリシア語原文との比較を離れて存在しうる。また、翻訳の適切さの吟味においては、文献学的な議論ではなく、歴史的な文脈を超越した「理性」に基づく哲学的な討論が重要となる。こうした対立は、以下に見る通り、15世紀中葉以降も持続していくだろう²³⁾。

3. ジョヴァンニ・ピコ・デッラ・ミランドラとエルモラオ・バルバロの 修辞学・哲学優劣論争

ヴェネツィアの貴族の家門に生まれたエルモラオ・バルバロ（1453/54-93）は、貴族の子弟の通例により、幼い頃から外交官の父に従って各国を訪問し、1471年に「大議会」（Maggior Consiglio）、1483年には「元老院」（Senato）に参加したが、1471-77年のパド

²²⁾ *Ibid.*, pp. 185-186: “Tu uero ex disputatione hac breui breuem hanc conclusionem assume, ut translationi antiquae, cum moralia quaesieris, adhaereas, traditionem uero modernam, de qua nobis extitit sermo, ut apostillam quandam illis in locis, ubi aliquid tibi apertius explicare uidebitur, habeas, in textum autem non acceptes.”

²³⁾ ブルーニ=アロンソの論争は、ミラノ大司教フランチェスコ・ピッコルパッソ（ピッツォルパッソ）（Francesco Piccolpasso [Pizolpasso]）、ポッジョ・ブラッチョリーニ（Poggio Bracciolini）、ピエル・カンディド・デチェンブリオ（Pier Candido Decembrio）を仲介者として巻き込みながら、噛み合わないままその後も続いた（“Der Streit”, cit., pp. 186-210）。さらに、ブルーニを起点とする哲学の翻訳論は、15世紀イタリアでは、ヨアンネス・アルギュロプロス、ゲオルギウス・トラペズンティウス、テオドロス・ガザ（Theodoros Gaza）のようなギリシア人学者を中心として、さらに展開していく。ブルーニの流儀の「意味を移す」翻訳法は、遠く16世紀中葉フランスのジョアシャン・ペリオン（Joachim Périon）によるアリストテレスのキケロ主義的ラテン語訳にまで反響している。こうした諸論点の研究は、今後の課題となるだろう。

ヴァ大学での勉学ののち、アリストテレスおよびその古代の注解者の研究を始めた²⁴⁾。とりわけ、『弁論術』のラテン語訳、紀元4世紀の注解者テミスティオスの注解(*Paraphrasis*)のラテン語訳(1481年に印刷本初版刊行)をつくり、アリストテレスの論理学・自然学を研究した。このように、バルバロは、ブルーニの世代の人文主義的翻訳を受け継ぐとともに、中世期のスコラ学者よりもアリストテレスに近いと人文主義者たちが考えた古代末期のギリシア人による注解の研究・翻訳を行なったのである。エルモラオ・バルバロには、ほかに、プリニウスの本文研究(*Castigationes plinianae*)という重要な仕事がある。

ボローニャ近くの小さなミランドラ公国の領主の一族に属していたジョヴァンニ・ピコ・デッラ・ミランドラ(1463-94)は、広い範囲にわたる哲学研究を行ない、マルシリオ・フィチーノ(1433-99)の混淆主義および「古代神学」的歴史観から影響を受けながら、プラトン・アリストテレスから中世のスコラ学者を経てユダヤ教のカバラにまで到る諸哲学を有和させようという望みを抱いた²⁵⁾。よく知られた弁論『人間の尊厳について』(*De hominis dignitate*)、さまざまな哲学学派に関する900の『提題集』(*Conclusiones*)、「創世記」冒頭の注解『ヘプタプルス』(*Heptaplus*)に加えて、1491年には、アリストテレスとプラトンの調和をアリストテレス主義的な仕方でも果たそうとする『存在と一者について』(*De ente et uno*)を公表した。注意すべきことは、ロレンツォ・デ・メディチ(Lorenzo de' Medici)が支配するフィレンツェの人文主義・哲学研究に好意的な環境を中心として、ピコ、フィチーノ、ポリツィアーノといったフィレンツェ在住の人文主義者・哲学者、またエルモラオ・バルバロのような外国の人文主義者の交流が盛んに行なわれたという点である。ここで扱うバルバロ=ピコの論争も、ある程度の知的前提を共有する友好的な友人同士のやりとりであることに留意すべきだろう。その点で、ブルーニ=アロンソの論争とはいささか性格を異にする。

論争の発端は、バルバロが1485年4月5日にヴェネツィアからピコへ送った短い書簡にあった²⁶⁾。ピコにギリシア語の勉強を続けることを強く慫慂したあと、バルバロは次のように中世北ヨーロッパのスコラ学者を攻撃した。

あなたは次のことをご存知のはずだ。これほど長い期間にわたって、ギリシア語を知らなかった者がラテン語で書いたものはまったく残っていないということを。というのも、あのゲルマン人やチュートン人たちを、私はラテン語の著述家の数には含めて

²⁴⁾ バルバロの略伝として、次項目を参照。E. Bigi, "Barbaro, Ermolao", *Dizionario biografico degli Italiani*, Vol. 6, Roma, 1964, pp. 96-99.

²⁵⁾ ピコの思想的遍歴の略述として、次書を参照。Ch. B. シュミット, B. P. コーペンハイヴァー『ルネサンス哲学』榎本武文訳, 平凡社, 2003年, pp. 163-177。

²⁶⁾ "Hermolaus Barbarus Venetus Ioanni Pico. Miran. S.D.", in *Omnia Opera Angelī Politiani...*, Venetiis, 1498, sig. l vii r-l viii r.

いないのだから。あの者たちは、死滅したいま生きていないことはもちろん、生きている間でさえ生きてはいなかったのだし、もし生きているとすれば、劫罰と恥辱のうちに生きているのだ。なぜと言って、彼らは一般に、見苦しく、粗野で、無教養で、野蛮な者と呼ばれているのだから。あのような仕方存在することよりもまったく存在しないほうを選ばない人がいるだろうか？ [……] 輝かしく優雅な文体、あるいは少なくとも、ギリシア・ラテン双方のキリスト教の著述家〔教父を指す〕にさえ見いだされる純粋で純潔な文体こそが、著述家に永遠の称讃と記憶とを与えるのだ²⁷⁾。

バルバロはこうして、もっぱらギリシア語の知識に基づくラテン語の文体を判断基準とする修辞学的な観点から、スコラ学を攻撃した。

しかし、年来トマス・アクイナスやヨハネス・スコトゥス、アルベルトゥス・マグヌスを含むスコラ学者やアヴェロエスのようなアラブの哲学者を研究し、1485-86年にはパリ大学へ赴いてこの研究を続けることになるジョヴァンニ・ピコにとって、この攻撃は受け入れがたいものだった。早くも同じ1485年の6月3日に、ピコは長文の反論をフィレンツェからバルバロへ書き送っている²⁸⁾。修辞学に対して哲学を擁護するこのピコの書簡は、逆説的なことに、きわめて洗練された人文主義的ラテン語で書かれており、構成も凝っている。ピコ自身が直接バルバロに語りかける短い冒頭と末尾に挟まれた長い中間部は、「野蛮な」中世の哲学者の一人が現代によみがえってバルバロの攻撃に応えるという設定なのである。人文主義の特徴の一つである書簡のかたちをとった論文というジャンルの中でも、修辞・構成においてこれほど完成度の高い作品は数少ないだろう。研究者による解釈の中には、この「修辞学的な」構成を理由として、いわゆる「逆説的称讃」（たとえばエラスムスの『痴愚神礼讃』がその一例）のカテゴリーにピコの書簡を入れて、ピコの真意に疑問を呈するものもあるが²⁹⁾、ここでは、哲学の側からの修辞学への攻撃の論法を示

²⁷⁾ *Ibid.*, sig. l vii v: ‘Vnum te scio scire, nullius latina lingua tot saeculis extare monumenta, qui literis graecis caruerit. Nec enim inter auctores latinae linguae numero germanos istos et teutonas, qui ne uiuentes quidem uiuebant, ne dum ut extincti uiuant, aut si uiuunt, uiuunt in poenam et contumeliam. Appellatur enim uulgo sordidi, rudes, inculti, barbari. Quis malit sic esse quam prorsus non esse? [...] [S]ermo nitidus et elegans, saltem purus et castus, qualis uel in auctoribus christianis graecis latinisque perspicitur, laudem et memoriam sempiternam scriptoribus conciliat.’ (句読点にいくらか修正を加えてある。)

²⁸⁾ ピコとバルバロの往復書簡は、次の注解つき版から引用する。E. Barbaro e G. Pico della Mirandola, *Filosofia o eloquenza?*, ed. F. Bausi, Napoli, 1998.

²⁹⁾ Cf. Bausi, “Introduzione”, in *Filosofia o eloquenza*, cit., pp. 1-33, at 4-21. ピコ＝バルバロの論争を扱った研究文献として、Bausiの「序文」のほかに次を参照。L. Panizza, “Ermolao Barbaro e Pico della Mirandola tra retorica e dialettica: il *De genere dicendi philosophorum* del 1485”, in *Una famiglia veneziana nella storia: I Barbaro*, ed. M. Marangoni e M. Pastore Stocchi, Venezia, 1996, pp. 277-330.

す典型例として、文字通りにたどることにしよう。仮にピコ自身の見解が「野蛮な」哲学者のそれと同一ではないとしても、ピコが少なくともスコラ哲学者を代弁していたと見ることは可能だからである。

哲学者は、まず、われわれは文法学者たちではなく哲学者たちの間で生き続けるだろうと確言する。哲学者の務めは事物の真理を探究することであり、そのためには雄弁は必要ではない。弁論家のなすべきことと哲学者のなすべきことは正反対なのだ。なぜなら、弁論家の仕事は嘘をつくこと、人を欺くことにほかならないのだから。優雅な、念入りに磨き上げられた文体は、アカデメイアにではなく、民衆を説得することが必要な国家運営に携わる者に属する。市民と哲学者の服装は、両者の食物や言葉と同様に、異なっている。哲学者がこうしたものに凝ったとしたら、もはや哲学者ではなくなってしまうだろう。

もしピュタゴラスが食物なしに生きることができたら、野菜すら食べないだろう。自分の思想を顔の表情で、あるいはいずれにせよ言葉よりも小さなものの助けで説明することができたら、まったく話をしないだろう。言葉を磨き上げたり飾り立てたりしないのはもちろんのことだ³⁰⁾。

われわれ哲学者にとっては、いかに書くかよりも何を書くかが重要であり、用いる文体は実用的で荘重、簡潔なものであるべきだ。われわれが「一般に」(uulgo)見苦しく、粗野で、無教養だと考えられているのは、われわれの光栄とするところである。なぜなら、われわれは俗衆に向かって書くのではないから。古代の哲学者が謎や寓話を使ったのは、無知な民衆に理解できないようにするためだった。哲学者の言葉の似姿を求めるなら、(プラトンの『饗宴』の)アルキビアデスが語ったシレノスの小函がそれである。外側は醜く、内側には貴重な宝石が詰まっていたあの小函だ。キケロは哲学者に事物と学説に十分な雄弁だけを求めたし、プラトンは墮落させる詩人たちを彼の国家から追放し、国家運営を哲学者たちに委ねた。

なるほど、それ自体で崇敬に値する神的な叡智に装飾を与えればよりいっそう美しくなると言う人もいよう。だが、光輝あるものに何かを付け加えるとその輝きを奪い改悪することになってしまう。大理石造りの家に色を塗るとその威厳と美を台無しにしてしまうのと同じだ。

そのために、哲学は自らをあらゆる方向から見える裸体のままで示し、全身が人の眼

³⁰⁾ “Ioannes Picus Mirandula Hermolao Barbaro suo s.d.”, in *Filosofia o eloquenza*, cit., pp. 36-64, at 44: ‘Si posset Pythagoras vivere sine cibo, holeribus etiam parceret; si sua sensa aspectu, aut demum minore quam sermonis opera explicare, omnino non loqueretur, tantum abest ut linguam poliat et exornet.’

と判断の下にあることを望む。その全体があらゆる部分で人の気に入るだけのものを自らが持っていることを知っているのだ³¹⁾。

あるいは、哲学者に文飾を交えた話し方を求めないにしても、少なくともラテン語を使うことを求める人がいるかもしれない。しかし、哲学者が用いていないというこの「純粋なラテン語」(latinitas)なるものが一体何なのかを考えてみようではないか。われわれの哲学者たちが中世風のラテン語を用いる。すると、

あなたはすぐにこう叫ぶだろう、「これはラテン語ではない」。ここまでは正しい。「ローマ風に表現されていない」。これは真理よりも正しいことだ。「だから、正しくない」。この議論には過ちがある。アラブ人もエジプト人も同じことを話す。彼らはラテン語では話さないだろうが、それでも正しく語っているのだ。事物の名前は、人の意思〔慣習〕によって、あるいは本性によって定まっている。もし〔前者の〕偶然の決定によってだとするなら〔……〕あなたがたが野蛮人と呼んでいるこれらの哲学者たちが、あなたがたがローマ風の話し方をそう考えているのと同じように、彼らの間では神聖なものである話し方の規範を定めることを妨げるのは何なのか³²⁾？

この話し方をローマ風と呼ぶのが嫌なら、ガリア風、ブリタニア風、ヒスパニア風、あるいはパリ風と呼ばばよい。他方、もし事物の名前が本性によって定められているとするなら、事物の本性について意見を徴するのにふさわしい相手は、修辞学者と哲学者のどちらだろうか？

哲学者は叡智を雄弁から切り離し、歴史家、修辞学者、詩人は雄弁を叡智から切り離した。あなたは、前者が劫罰と恥辱のうちに、後者が名声のうちに生きるだろうと考えている。しかし、キケロも、訥弁の賢慮のほうが愚かなおしゃべりよりも好ましいと考えた。貨幣は、どこで鑄造されたかではなく、何の素材でつくられているかが重要なのだ。ローマ製の偽造金貨よりもチュートン製の純金貨幣を選ばないような者はいない。

言葉がなくともわれわれは生きることができる、おそらく不便ではあろうが。しかし、心がなくてはどうしても生きることができない。洗練された文学に不慣れな者は人間

³¹⁾ *Ibid.*, p. 54: 'Ob eam causam nudam se praebet philosophia, undique conspicuam, tota sub oculos, sub iudicium venire gestit: scit se habere unde tota undique placeat.'

³²⁾ *Ibid.*, p. 56: 'Clamabis actutum: "hoc non est Latinum", hucusque vere; "non est Romane dictum", hoc vero verius; "igitur non recte": peccat argumentum. Dicet Arabs eandem rem, dicet Aegyptius; non dicent latine, sed tamen recte. Aut enim nomina rerum arbitrio constant, aut natura: si fortuito positu [...] quid prohibet hosce philosophos, quos nuncupatis barbaros, conspirasse in unam dicendi normam, apud eos non secus sanctam ac habeatur apud vos Romana?'

的〔人文主義的〕ではない。が、哲学を欠いた者は人間ではないのだ³³⁾。

ルクレティウスとヨハネス・スコトゥスが、どちらも韻文で、自然と神と摂理について書いたとしてみよう。ルクレティウスは、事物の原理が原子と真空であり、神が物質的で人間に関心を持たず、万物が原子の偶然の遭遇から生成されると優雅なラテン語で語るだろう。ヨハネスは、自然の事物が質料と形相からなり、神が独立して存在する精神で万物を知り、最も悪しきものに到るまで万物に配慮するとラテン語とは呼べない粗野な言葉で語るだろう。詩人としてはルクレティウスがすぐれており、哲学者としてはスコトゥスがすぐれている。だが、前者はばかげた瀆神的なことを雄弁に語り、後者は訥弁だがいくらか称讃しても称讃し足りないことを語っているのだ。

こうして「野蛮な」哲学者の反論を伝え終えたあと、ピコは、短い末尾の部分で、私は以上の見解に完全に賛同するわけではないし、一つには弁論の技術の練習のため、もう一つはあなた（バルバロ）からの雄弁を擁護する弁論を誘い出すためにこれを書いたのだと念を押している。とはいえ、2つの単語の語源を発見しただけで思い上がり、哲学を軽蔑する「文法教師ども」（grammatistae）には自分は我慢がならないのだがとも書いている。ピコは、事物の認識だけが理由で「野蛮な」哲学者たちが何がしかの名声を得られるとしたら、哲学者の中で最も雄弁、雄弁な人びとの中で最も哲学的なバルバロはいかほどの称讃を得ることだろうと書簡を締め括る。

＊

日付を持たないエルモラオ・バルバロからピコへの返信は、ピコの手簡と同じように三つの部分からなり、中間部では同じく哲学者に語らせている。ただし、バルバロはこの部分を同時代のパドヴァ大学のスコラ哲学者——「パドヴァの猿」（Patavinus simius）——の口に乗せ、ピコの哲学擁護に対する反論を哲学者に行なわせるという、ピコの手簡よりもさらに凝った構成をとっている。まず、冒頭で、バルバロはあなた（ピコ）の手簡が2つの理由から喜ばしいものだったと述べる。一つには、雄弁の敵たち（哲学者）が雄弁な人びとによってでなければ擁護されえないから。もう一つの理由は、パドヴァ在住の友人から、哲学者たちがピコの擁護を忌み嫌っていることを知らされたから。あのロバどもは、ピコの雄弁きわまる学識に満ちた擁護を少しでも理解できたなら、得意気に耳を動かすだろう。

中間部に登場するパドヴァの哲学者は、ピコを「文法学者」（grammaticus）と規定することから始める。われわれの擁護者を自称するこの者は、本心から擁護しているのではないに違いない。だが、これが誠実な弁護だとしてみよう。われわれが敗訴したら、不都合

³³⁾ *Ibid.*, p. 60: 'Vivere sine lingua possumus, forte non commode; sed sine corde nullo modo possumus. Non est humanus qui sit insolens politionis literaturae; non est homo qui sit expers philosophiae.'

なことだ。勝訴したら、もっと悪い。われわれ自身の理由によってではなく、われわれが忌み嫌っている雄弁の力によって勝つことになるのだから。しかし、私は哲学者だから、この者が用いる例や寓話や詩人の証言などではなく、仮説、帰納、三段論法を、「必然的論証」(apodixis, ἀποδείξις)を欲するのだ。ここから、哲学者はピコの主張をさまざまな論理学・弁証術的論法によって反駁しようと努めるが、アリストテレス、キケロ、ポエティウスの論理学的著作からとられたこれらの論法を彼に教えたのは修辞学者たちだということが明らかになる。

弁論家どもも矛盾と対立による論法を知っており、「二重否定」命題からなる、あの者たちが確言するところによれば、すべての論法の中で最も迫力があり強い論法を特に頻繁に用いるのだ。しかし、この「二重否定」命題、この迫力があり強い命題が何であるのか、彼らは教えてくれぬ。われわれが一度も読んだことがないし今後も読むつもりもないキケロとアリストテレス『トピカ』、『詭弁論駁論』を参照しなさいと言うばかりだ³⁴⁾。

弁論家たちは、哲学は全体が善であり、一方修辞学が哲学の一部であることをほとんどすべての逍遥学派の学者が述べているし、修辞学が政治学の一つの「種」であることをアリストテレスが述べていると言う。

これが真であるのか、はたまたその反対か、私は知らぬ。アリストテレスがどの箇所でもこれを言ったのか見つけることができないからだ『弁論術』第1巻]。だが、この論法が「類」から発するものであることは十分理解される。もっとも、このような恐るべきことをアリストテレスが言ったのかどうか、われわれはほとんど気にもかけない。この哲学者の書物は、ほぼすべて、あまりの難解さのゆえにわれわれが打ち捨てて顧みないものだからな。あの者ども[弁論家]は(自慢している通り)熱心に読んでいるが。それゆえに、牛と豚の肉を食するわれわれは、こうした果実をあの胃弱で暇な者どもが盗んでいくのを容認し、アリストテレスについてのこのような論争を岩礁のように避ける。他の問題に対しては執拗で恐れを知らぬわれわれだが³⁵⁾。

³⁴⁾ “Hermolaus Barbarus Ioanni Pico Mirandulano”, in *Filosofia o eloquenza*, cit., pp. 66–94, at 74: ‘Noverunt enim et oratores locum a repugnantibus et contrariis, eoque vel frequentissime utuntur, qui propositione constat ὑπεραποφαντικῇ, et est inter omnes, ut ipsi praedicant, instantissimus et acerrimus. Quid autem sit ὑπεραποφαντικὴ propositio, quid instans et acer sermo, nihil docent, sed nos ad Ciceronem et Aristotelem, nunquam a nobis lectos, nunquam legendos remittunt.’

³⁵⁾ *Ibid.*, pp. 76–78: ‘Hoc ego verum sit an contra, nescio; nec enim Aristotelem ubi hoc dixerit invenio. Sed satis intelligitur argumentum a genere sumptum esse; quanquam, dicat haec Aristoteles portenta necne, ipsi parum laboramus, quandoquidem philosophi eius omnes fere libri nimiam propter

パドヴァの哲学者による反駁に充てられている長い中間部において、こうした入り組んだ表現法でバルバロが表わそうとしたことは、いくつかある。スコラ学者がアリストテレスの原典を十分に知らず、古代のアリストテレス主義者や古典的著述家に無知であるということ（彼らの生活習慣にまでわたる諷刺的な筆致は、エラスムスら 16 世紀の人文主義者たちに受け継がれていくだろう）。反対に、バルバロのような人文主義者・修辞学者がアリストテレスをギリシア語で読めるばかりでなく古代の注解者を含む周辺の文献をも熟知しており、本来スコラ学の領分だった論理学・弁証術の論法を駆使して修辞学の擁護と哲学への批判を行なうことが可能だということ（もちろん、哲学擁護をするはずの哲学者が、自らを擁護した弁論家——ピコ——への憎悪のために哲学批判を代弁するというバルバロの構成上の力業もある）。

書簡の末尾では、ピコへの好意は哲学者たちからは期待することはできず、われわれ人文主義者にこそ期待すべきであること、野蛮で愚かな哲学を擁護しようと望むのは「エチオピア人を白くする」（Αἰθίοπα λευκαίνειν）ことにほかならないことが述べられる。また、この部分にはとりわけギリシア語からの引用句が数多く見られるが、ここにはギリシア語の研究を続けるようピコに促していたバルバロの最初の書簡での主張を再度強調する意図がこめられているだろう。

4. アンジェロ・ポリツィアーノの哲学論³⁶⁾

15 世紀後半のフィレンツェを代表する人文主義者であり、詩人としても重要な作品を残したアンジェロ・ポリツィアーノ（1454-94）は、十代末にロレンツォ・「イル・マニフィコ」が当主だったメディチ家の庇護下に入り、ロレンツォの子供たちの家庭教師を務めるかたわら、同家の豊富な蔵書を用いてギリシア・ローマ文学を幅広く研究したが、1480 年からフィレンツェ大学でギリシア語・ラテン語の雄弁（修辞学）を教える講座の教授職に就き、94 年の死まで同じ職にとどまった³⁷⁾。人文主義者としてのポリツィアーノは、エルモラオ・バルバロなどとともに、人文主義の文献学化を推進して、とりわけローマ文学の典拠としてのギリシア文学を研究することにより、古代世界の知見を拡大しようと努めた。その成果が、1489 年に印刷本として刊行された『雑録』（第 1 集）である。中世期・スコラ学者を野蛮と見なす点ではブルーニの世代と合致していたが、文献学に特化

obscuritatem a nobis deserti sunt, ab illis (ut iactant) occupati. Propterea nos, qui bovillas edimus et suillas, quique pomenta nobis haec delicatos et ociosos homines suffurari facile passi sumus, congressum hunc in Aristotele quasi scopulum vitamus, in cetera pertinaces et imperterriti.’

³⁶⁾ 本節は次稿に既発表の内容を含む。「アンジェロ・ポリツィアーノの哲学論」、『創文』第 482 号（2005 年 12 月），pp. 20-23。

³⁷⁾ ポリツィアーノの略伝として、次項目を参照。E. Bigi, “Ambrogini, Angelo, detto il Poliziano”, *Dizionario biografico degli Italiani*, Vol. 2, Roma, 1960, pp. 691-702.

した人文主義者像をつくりあげていった点では大いに異なっている。ポリツィアーノはまた、キケロをラテン語散文の文体の理想と考える 15 世紀前半の全般的な風潮から脱皮して、特に帝政期ローマの「白銀時代」に属する作家たちの文体をも採り入れ、文献学者としての学識に基づく多様な文体を獲得しようとした³⁸⁾。盟友だったヴェネツィア人バルバロとはこの点でも似通っている。

14 年間にわたるポリツィアーノのフィレンツェ大学での講義は、当初はおおよそ標準的なギリシア・ローマ文学を対象にしたものだったが、1490 年代に入るところから、アリストテレスの哲学書を扱いはじめる。1480 年代の講義内容を摘記すると、クインティリアヌスならびにスタティウス、オウィディウス、ウェルギリウス、ホメロスなどの詩人が大勢を占める。ところが、1490-91 年度に『ニコマコス倫理学』および『自然学』をとりあげたのを皮切りに、91-92 年度には『カテゴリー論』、『命題論』、『詭弁論駁論』、92-93 年度には『分析論前書』、93-94 年度には『分析論後書』および『トピカ』と、特に論理学の分野でのアリストテレスの著作を集中的に論じるようになる³⁹⁾。1492 年の講義を始めるとあって「開講演説」として発表したのが、ここで見る『ラミア』(*Lamia*)である。これは講義のほぼ半月後の 11 月中旬に早くもフィレンツェで印刷刊行された⁴⁰⁾。

この時代の大学において、年度の初めに講義に先立って行なわれるのが通例だった「開講演説」は、正式な弁論であり、整ったラテン語で修辞を駆使し、整然とした構成を持つものが多かった。論じられる主題に関する説明、その有用性、テキストの著者についての伝記的紹介、講義者が採用するアプローチの正当化、学問研究への勧奨などを適宜組み合わせ、聴講者に語りかける⁴¹⁾。しかし、『ラミア』はいささか異例の内容と構成を持っている。それは、人文主義者=雄弁家がアリストテレスの哲学的著作について講義を行なうことに関する「哲学者」たちからの批判に対する反撃を主たる内容としている。この点

³⁸⁾ Cf. 前注 (3)。

³⁹⁾ ポリツィアーノのフィレンツェ大学における講義に関しては、次書を参照。V. Branca, *Poliziano e l'umanesimo della parola*, Torino, 1983, pp. 73-90 (Cap. V: “Professore nello Studio fiorentino”). 同書 p. 86 n. 22 に年度ごとの講義題目がまとめられている。

⁴⁰⁾ 『ラミア』は次の 1553 年パーゼル版全集から引用する。“Angeli Politiani praelectio in Priora Aristotelis Analytica. Lamia”, in *Angeli Politiani Opera ... Omnia*, Basileae, 1553, pp. 451-461. (綴り字と句読点にいくらか修正を加えた。) なお、1492 年フィレンツェ初版 (*Angeli Politiani praelectio in Priora Aristotelis Analytica. Titulus Lamia*, Florentiae, 1492) およびこの初版に基づく注解つき校訂版 (A. Poliziano, *Lamia. Praelectio in Priora Aristotelis Analytica*, ed. A. Wesseling, Leiden, 1986) を参照した。Wesseling による詳細な注解も適宜参照した。

⁴¹⁾ 標準的な「開講演説」のパターンに準じたポリツィアーノの弁論として、1480-81 年度の「クインティリアヌスとスタティウスに関する弁論」を参照。“Angeli Politiani oratio super Fabio Quintiliano et Statii Sylvis”, in *Politiani Opera*, cit., pp. 492-498. これは、やや異例な著者の選択を説明・正当化する「意図」(intentio) (pp. 492-496), 「有用性」(utilitas) (p. 496), 「伝記」(vita) (pp. 496-497) によって構成されている。

で、一人の人文主義者による弁論というかたちではあるが、「人文主義対スコラ学」の論争の伝統に属するのである。さらに、『ラミア』は寓話の形態をとっており、アイロニーと諧謔に満ちた、練り上げられた個性的な作品となっている。構成について言うなら、『分析論前書』を対象とする講義の方法などに関する「開講演説」本来の記述は、1492年フィレンツェ初版本全30ページのうち末尾の1ページにとどまり、残りの29ページは、寓話と哲学・哲学者をめぐる多様な考察とに充てられている。

ポリツィアーノは、まず、私はしばらく事実に基づく寓話を語ろうと思うと言う。そして、聴衆に、あなたがたは「ラミア」という名前をご存知かと問いかける。祖母は子供の私にこの怪物のことを語って大いに怖がらせたものだ。泣き叫ぶ子供を貪り食う化物だ。プルタルコスは、「ラミア」が眼球を自由に着けたりとりはずしたりすることができると書いている。

ところでこの「ラミア」は、家を出るときには眼球をとりつけて、公共広場、大通り、四辻、路地、教会、公衆浴場、食堂、市場を限なく歩きまわる。そして、あらゆることを逐一眺め、調べ、精査する。どれほど巧みに隠しても、この眼を逃れることはできない。[……] さて、家に帰ると、敷居の上ですぐに眼球をとり外し、箱にしまいこんでしまう。こうして、家の中ではいつも盲目、外ではいつも眼があるというわけだ⁴²⁾。

フィレンツェの人びとよ、あなたがたは「ラミア」たちをご覧になったことがないか。彼らは、どの街にも、このフィレンツェにも大勢いる。仮面をかぶっていて人間のように見えるが、実は「ラミア」なのだ。

「ラミア」たちの幾人かが、私がたまたま通りかかったのを目にとめて立ち止まり、見覚えがあると言わんばかりに、ものを買う客がするようにしげしげと眺め、やがて互いにうなずいてこう小声でささやきあった。「ポリツィアーノだ。当のご本人だ。あの道化師だよ。こうして突然哲学者になったあのお方だ」。そして、こう言うと、一針刺した虻がするように、飛び去っていった⁴³⁾。

⁴²⁾ “Lamia”, in *Politiani Opera*, cit., p. 451: ‘Sed enim Lamia haec, quoties domo egreditur, oculos sibi suos affigit, uagaturque per fora, per plateas, per quadriuias, per angustias, per delubra, per thermas, per ganeas, per conciliabula omnia: circumspicitque singula, scrutatur, indagat, nihil tam bene obtexeris, ut eam lateat. [...] Domum uero ut reuenit, in ipso statim limine demit illos sibi oculos, abiicitque in loculos. Ita semper domi caeca, semper foris oculata.’

⁴³⁾ *Ibid.*, p. 451: ‘Harum igitur aliquot praetereuntem forte conspicit me, sustiterunt, et quasi noscitant, inspexere curiosius, ueluti emptores solent, mox ita inter se detortis nutibus consusurrarunt: Politianus est, ipsissimus est, nugator ille scilicet, qui sic repente philosophus prodiit. Et cum dicto auolarunt, quasi uespae dimisso aculeo.’

この一節から明らかになるように、「ラミア」とは、フィレンツェ大学でのポリツィアーノの同僚である哲学教授たち、とりわけ、ポリツィアーノが「突然」アリストテレスを講じるようになったことを快く思わないスコラ哲学者たちを揶揄する呼称なのである。しかし、ポリツィアーノは、私は「ラミア」たちが言うように哲学者ではないし、哲学者と思われたくもない、私は哲学者からは程遠い人間なのだからと言う。そこで、まず、人びとが哲学者と呼んでいるこの生きものが何なのかを考え、次に、哲学が恥ずかしく悪いものなのかどうかを論じ、最後に、私自身について、私の仕事について話すことにしようと述べて、導入部を終える。

これに続く哲学者をめぐる部分で、ポリツィアーノは、最初にピュタゴラス——一度もその名を挙げず、弟子たちが用いた「師」(Ipse)という呼び名を使っている——をとりあげている。ピュタゴラスは弟子たちに、思わず笑い出したくなるような、さまざまな滑稽な戒律を課した。また、雌熊や雄牛に話しかけて手なずけようともした。しかし、僭主レオンにおまえは何者かと問われて、ピュタゴラスは自らを「哲学者(愛知者)」と称した。美の観照だけに満足し、天体の運行を観察し、数と比率の本性を解釈する、叡智を愛する者の謂でそのように自称したのである。次にポリツィアーノが引き合いに出すプラトン——「アテナイのある老人」(Atheniensis quidam senex)——は、哲学者に必要なものを、数の学問、神々と生物の生成の知識、幾何学、真と偽とを分別する弁証術として、こうした学問すべてを修めなければ、哲学者は生成消滅の影響を被らない事物の本性を理解することができないと教えた。プラトンは、さらに、こうした哲学者は非の打ち所のない血統を持つ両親から生まれなければならないし、金銭への愛着のために叡智の追究を犠牲にするような人間であってはならないと説いた。(しかし、「ラミア」たちがするように、隠されたことは何にでも探りを入れたり、家の中の秘密を詮索したりしてはならない。人間は他人の欠点はよく見えるが自らの欠点は見えないものだ。)このような人間が真の哲学者だが、こうした人間だけが現世においても幸福なのだとプラトンは言った。

しかし、そのような人間が見いだされることはきわめて稀であり、白いカラスよりもめずらしいものだ[とプラトンは言った]。さて、私がもし自分をいま述べたような人間であると言ったり考えたりしたら、コロイボス[愚かさで知られたギリシア人]よりも愚昧だということになってしまう。私は、哲学者にふさわしいあの諸学問をほとんど修めていないし、あのような品行と徳性からは最も遠く隔たっているのだから⁴⁴⁾。

⁴⁴⁾ *Ibid.*, p. 454: 'Caeterum inueniri omnino tales quam paucissimos, et pene albis esse coruis rariores. Nunc si me talem uel dicam, uel etiam opiner esse, qualem modo philosophum descripsi, stultior Coroebo sim. Nam et disciplinas illas uix attigi, quae philosopho competunt: et ab iis, quos dixi, moribus ac uirtutibus absum longissime.'

もちろん、こうした謙譲でポリツィアーノが含意しているのは、彼を批判している職業的「哲学者」も真の哲学者には程遠い存在だということなのである。

次に、哲学が空しい悪しき技芸なのかどうかをめぐる長い部分では、ポリツィアーノは、哲学への批判を斥けて、プラトンの『国家』に由来する洞窟の説話によって哲学者を称揚する。哲学者は、洞窟の壁に映る影を去って、洞窟の外の太陽の光を目にした人間であり、事物の本質を見てとることができるのは哲学者だけなのである。

ポリツィアーノの職分を明らかにする最後の部分では、「ラミア」たちが登場して、ポリツィアーノを直接攻撃する。おまえが躍起になって自分が哲学者ではないことを証明しようとするのは無駄なことだ。われわれはもちろんおまえが哲学者だなどとは思ってはいない。それまで哲学を研究したこともなかったおまえがもう3年間も哲学者を自称し、知りもせず学びもしなかった事柄を教授していることに腹を立て、道化師と呼んだのだと。この攻撃に対して、ポリツィアーノは次のように返答する。

私は自分をアリストテレスの解釈者と称する。どれほどふさわしい解釈者かを言うことは重要ではない。しかし、確かに解釈者を自称し、哲学者を自称しない。もし王の解釈者だったとしても、そのために自分を王だと考えたりはしないし、われわれ「ラテン人」の間ではドナトゥスとセルウィウス、ギリシア人の間ではアリストアルコスとゼノドトスは、詩人を解釈しているからといって、自らを詩人と称しはしない。かのピロポノスは「……」アリストテレスの立派な解釈者ではないだろうか？ だが、彼を哲学者と呼ぶ者はおらず、皆文法学者と呼んでいるのだ⁴⁵⁾。

こうして、ポリツィアーノは、古代の著名な文法学者やアリストテレス注解者と自らを比較しつつ、自らの職分の自律性を揚言する。

文法学者の役割とは、あらゆる種類の著述家、つまり、詩人、歴史家、弁論家、哲学者、医学者、法学者を詳しく調べて解説するところにある。われわれの時代は古代の事柄に無知なため文法学者をあまりに狭い場所へ閉じ込めてしまった。ところが、古代においては、この集団は非常な権威を持っていて、文法学者だけがあらゆる著述家の検閲者であり裁判官でもあったのだ。そのために、彼らは批判者とも呼ばれていた「……」⁴⁶⁾。

⁴⁵⁾ *Ibid.*, p. 460: 'Ego me Aristotelis profiteor interpretem: quam idoneum, non attinet dicere: sed certe interpretem profiteor, philosophum non profiteor. Nec enim si regis quoque essem interpretes, regem me esse ob id putarem, nec apud nos Donatus, puta, et Seruius, apud Graecos Aristarchus et Zenodotus continuo se poetas profitentur, quoniam quidem poetas interpretentur. At non Philoponus ille [...] idoneus Aristotelis est interpretes? At eum nemo philosophum uocat, omnes grammaticum.'

⁴⁶⁾ *Ibid.*, p. 460: 'Grammaticorum enim sunt hae partes, ut omne scriptorum genus, poetas,

古代の文法学者は、偽書や偽作者を決定してそれらを正典から排除する権限すら持っていた。つまり、「文法学者」(γραμματικός)・「批判者」(κριτικός)というギリシア語はラテン語の *literatus* に相当し、「文献学者」と呼ぶほうが適切な職分なのだ。

さて、私に話を戻そう。つまり、私は、哲学者を解説しているからといって、哲学者という名前を空位のものとして僭称するわけではない。あなたがたにお聞きするが、誰かが私に「法学者」とか「医学者」と呼びかけたとして、この人に自分が嘲笑されていると信じないほどに、私が傲慢あるいは鈍感だとお考えだろうか？ それでも、久しく前から、私は市民法についても医学の著述家についても大いに苦心して注解をつくりつつあるのだ。しかし、それが理由で、「文献学者」以外の名前を要求しようとするわけではない⁴⁷⁾。

かくして、ポリツィアーノは、古代から続く文献学者の系譜に自らを誇り高く位置づけるとともに、文献学者は哲学、法学、医学などのどの学問領域についても解釈・解説を行なう資格を有することを高らかに宣言したのである。

(えのもと たけふみ 一橋大学大学院経済学研究科助教授)

historicos, oratores, philosophos, medicos, iureconsultos excutiant atque enarrent. Nostra aetas parum perita rerum ueterum nimis breui gyro grammaticum sepsit: at apud antiquos olim tantum autoritatis hic ordo habuit, ut censores essent et iudices scriptorum omnium soli grammatici, quos ob id etiam criticos uocabant [...].’

⁴⁷⁾ *Ibid.*, p. 460: ‘Nunc ad me redeo: non scilicet philosophi nomen occupo, ut caducum [...] propterea quod philosophos enarro. Rogo uos, adeon esse me insolentem putatis aut stolidum, ut si quis iurisconsultum me salutet, aut medicum, non me ab eo derideri prorsus credam? Commentarios tamen iamdiu [...] simul in ius ipsum ciuile, simul in medicinae auctores parturio, et quidem multis uigiliis, nec aliud inde mihi nomen postulo quam grammatici.’

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 55*

発行所 東京都国立市中 2 - 1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 2006 年 3 月 31 日

印刷所 東京都新宿区早稲田鶴巻町 565-12

(有)啓文堂松本印刷
